

聖書：ヨハネの黙示録 6：9～17

説教題：神と子羊の御怒りの日

日時：2021年2月21日（朝拝）

今、私たちは子羊キリストが天の御座に着いている方（神）から7つの封印で封じられている巻物を受け取り、その巻物を開き始めたという幻について見ています。この巻物は、この世界に関する神のご計画が記された巻物です。それを十字架と復活を経て天に上げられたイエス様が受け取り、開いて行かれます。このことは神が世界の歴史を導く主権をイエス様に与えたことを意味します。イエス様はその主権をもって巻物に記されてある神のみこころを実現実行して行かれます。前回、最初の4つの封印が開かれた時の幻について見ました。戦争、暴動、飢饉、死病といった様々な災いが神のさばきとして世界に臨むことが示されました。今日は7つの封印の内、第5番目と第6番目の封印が解かれる場面を見て行きます。

第5の封印が解かれてヨハネが見たのは天の光景でした。そこに見たのは神のことばと自分たちが立てた証のゆえに殺された者たちのたましいでした。一言で言えば殉教者たちです。ヨハネはアジアにある7つの教会に宛ててこの書を書きましたが、その教会には実際に殉教した人たちがいました。2章13節にペルガモンで殉教したアンティパスという人の名も記されていました。その人々はどうなったのか。また先の4つの封印の話に示されたように、今後さらに困難な時代の中でいのちを落とす信仰者たちも出るでしょう。その彼らがどんな状態にあるかがここに示されています。

ヨハネが見たのは、その彼らが天にいた！ということでした。死においてたましいと肉体は分離し、体は地上に残され、墓の中に収められるなどします。しかしたましいはどうなるのか。ここに信者たちのたましいは天に行くということが示されています。イエス様と一緒に十字架にかかった強盗の一人に「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と言われました。

さらに具体的にそのたましいは祭壇の下にいました。これはどういう意味でしょうか。旧約時代にいけにえの血は祭壇の土台に、すなわち祭壇の下に注がれました。ですからこれは彼らの殉教を神はご自身へのいけにえのようにして受け入れられた

ということでしょうか。パウロがⅡテモテ4章6節で「私はすでに注ぎのささげ物となっています」と語った言葉が思い起こされます。あるいはそこはまことのいけにえキリストの血を注がれた場所だと捉えれば、そのキリストの血による贖いの力の下で彼らは守られているという意味にも取れます。いずれにせよ、神のみそば近くに引き寄せられて、その特別な祝福と守りの下に生かされていることをこれは意味しているように思われます。

なおここで言われているのは文字通り殉教した人たちだけなのかについては議論があります。多くの注解者は、主に忠実に歩んだすべての聖徒たちもここに含まれると見ます。大事なのは最後に殉教したかどうかよりも、その前に書かれている「神のことばと証し」のために歩んだかどうかである。その結果、最後に殉教した人は特別で、そうではない（殉教しなかった）人はより誉れの低い位置に置かれるわけではない。ここでは信者全体が殉教者たちによって代表されているのだと。ある人は、主のすべての弟子は、そのエッセンスにおいて殉教者だと言っています。マタイの福音書16章24～25節：「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。」クリスチャンとは、主に従うことを第一に選び取る人たちであり、そのためにこの世のいのちを失うことも厭わない覚悟を持つ者たちです。まさに本質的に殉教者となることを受け入れている者たちです。そのようなすべての聖徒たちもここに含むということです。

その彼らは大声で叫びました。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」これは自分たちに代わって復讐してほしい、恨みを晴らしてほしいという祈りではなく、神の正義の実行を求める祈りです。彼らは最初に「聖なるまことの主よ」と呼んでいます。この聖なる方の前でいつまでも悪がそのままにされている状態はふさわしくない。悪を行う者たちは、「神は見えていないのだ。いや神などいないのだ！」と言ってやりたい放題のことをしています。こうして神の御名がそしられています。だから早くに正義が地に行われて、神が聖であることが証明され、神の名誉が回復されることを彼らは求めたわけです。

その祈りに対して 11 節で 2 つの応答が示されます。一つは「彼ら一人ひとりに白い衣が与えられた」ということです。白い衣は 3 章 4～5 節にも出て来ました。それは聖さを象徴し、神の前に罪のない者たちであること、神に受け入れられている者たちであることを示します。ここでは特に神が彼らを正しいと認めている証明として白い衣が与えられたと言われていると考えられます。祭壇の下にいた殉教者たち地上で苦しめられ、辱められ、卑しめられました。地上の悪はまださばかれています。いつまでなのですかと彼らは問うています。これに対して神は彼らに白い衣を与えて、彼らこそを正しいと認めていることをはっきり示したのです。地に住む者たちへのさばきはこれからですが、神は最終的になされる判決（さばき）をこの時点ではっきり彼らに示し、御前における彼らの正しさを証明されたのです。

もう一つの応答は 11 節後半の声です。そこでは同じしもべ仲間、同じように殺されようとしている兄弟たちの数が満ちるまで待っていなさい！と言われます。ここにいつまでなのですか？という問いへの答えがあります。神は意味もなくダラダラとさばきの日を延ばしておられるわけではありません。救われるべき最後の一人が信仰を全うして召されるのを待っていると言います。神はこのように完全で詳細なご計画のもと、世界の歴史を導いておられます。それがゴールに達する時まで待っていなさい！休んでいなさい！と言われています。その時がいつかは神に委ねて、しっかりした計画に基づいて今も世界を導いておられる神にお任せして安んじていなさいと言われたのです。

そうしてついに第 6 の封印が解かれる場面となります。ここはいよいよ世界の歴史の最後の時、主の再臨直前の時のことです。その時の様子について大きく二つのことが述べられています。一つは天変地異、被造世界の崩壊です。12～14 節には大きな地震や太陽、月、星に現れる異常な現象のことが述べられています。これは旧約聖書で前から言われて来たものです。地震は神が来られる時に伴う現象として言われて来ました。出エジプト記 19 章 18 節：「シナイ山は全山が煙っていた。主が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。煙は、かまどの煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。」 続く太陽と月の異常現象については、ヨエル書 2 章 30～31 節：「わたしは天と地に、しるしを現れさせる。それは血と火と煙の柱。主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。」 星の異常現象や天が巻物のように巻かれることについてはイザヤ書 34 章 4 節：「天の万象は朽

ち果て、天は巻物のように巻かれる。その万象は枯れ落ちる。ぶどうの木から葉が枯れ落ちるように。いちじくの木から実がしぼんで落ちるように。」そしてこれらの旧約聖書の言葉を受ける形で、イエス様もご自身が再臨する日についてマタイの福音書 24 章 29～30 節でこう言っていました。「そうした苦難の日々の後、ただちに太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」これらの表現の内、どこまでが字義的に取るべきで、どこまでが象徴として、あるいは文学的に取るべきかについては多少の意見の違いはあります。しかしこの世界が大きな変化を遂げるために、現在の秩序がある意味で崩壊し、さばかれ、新しい秩序に取って代わられるというのは聖書全体の主張です。本来、この世界は神が造られたものとして非常に良いものでした。しかし人間が罪を犯したことによって、この世界にはあらゆる不調和や混乱が生じるようになりました。神と人間の関係が壊れたばかりでなく、人間と人間の関係も、人間と自然世界との関係も壊れてしまいました。神はなお恵みにより、世界が最終的な破滅に至らないように守っておられ、そのため今でも創造当時の輝きが随所に現れていますが、一方で罪による不協和音はいつでもどこでも鳴り続けているのが現状です。その世界がついにさばきを刈り取らなければならない日が来る。ペテロの手紙第二 3 章 10 節：「その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。」 12 節：「その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」このように表現されるほどの激しい変化を経て、罪はさばかれ、除かれて、新しい秩序へと移行します。ですからやがて見る黙示録 21 章 1 節にこう記されます。「また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。」

そしてこの被造世界の崩壊とセットで述べられているもう一つのこととは人々の狼狽と恐怖です。15 節に様々な種類の人々が出て来ます。「地の王たち、高官たち、千人隊長たち、金持ちたち、力ある者たち、すべての奴隷と自由人が、洞穴と山の岩間に身を隠した」と。これはこの日には地位の高い人も地位の低い人も関係なくなるということです。この世では高い地位にある人、経済的に裕福な人々は、自分たちは特別で、何かあっても大丈夫。そうでない人たちよりは守られると考えているかもしれません。しかしその日には自分たちが頼りにしていたものが何ら頼りに

ならない。ローマ皇帝のような立場にある人が一般の人と一緒に逃げ惑うのです。人々の間にあった区別は何の違いももたらさない。守ってくれると思ったものは自分を守ってくれない。みな、間もなく現れる神から何とかして隠れようとして逃げ惑う。この表現も旧約聖書から言われて来たものです。イザヤ書 2 章 19 節：「主が立ち上がり、地を脅かすとき、人々は主の恐るべき御顔を、その威光の輝きを避けて、岩の洞穴や土の穴に入る。」 21 節：「主が立ち上がり、地を脅かすとき、人々は、主の恐るべき御顔を、その威光の輝きを避けて、岩の割れ目や、巖の裂け目に入る。」 しかし彼らの恐れは収まりません。そこで山や岩に向かってこう言います。16～17 節：「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」 山々が崩れ落ちたら死ぬだけではないでしょうか。つまりこれは死ぬ方がまだましだ！ということです。さばきの神に直面することは死ぬことよりも怖い。だから倒れ掛かってくれ！と叫ぶ。これも旧約聖書にある言葉です。ホセア書 10 章 8 節：「彼らは山々に向かって『私たちをおおえ』と言い、丘に向かって『私たちの上に崩れ落ちよ』と言う。」

ここで彼らが特に恐れていること、それはこの日が「御怒りの日」であることです。「怒り」についてのメッセージは多くの人には聞きたくないと思うかもしれません。また神に怒りは似つかわしくないのでは？と思う人もいるでしょう。しかし神の怒りは罪に対する聖なる神の当然の反応です。悪に対して厳正なさばきを要求する態度のことです。私たちの間で見られるような感情的な怒りとは異なります。しかしそれだけに徹底的な正義を求める神の怒りはこの上もなく恐ろしいものです。さばかれる人々は悪を行って来ただけでなく、神が与えた救いの機会を生かさなかった人々です。神がキリストを送り、その方の身代わりによる救いを提供し続けたのに、それを退け、足蹴にして来た。その結果、憐みの期間はついに終わりとなり、御怒りの日が来る。その日は神の御怒りの日であるだけでなく、神と子羊の御怒りの日とされています。私たちにとって救いの唯一の希望である子羊も御怒りを現すとしたら、もう望みはどこにもありません。あとは厳粛にさばきが行われるのみです。逃げ場はどこにもありません。そのことを思って今日の箇所は「だれがそれに耐えられよう」という言葉で終わっています。

最後に今日のまとめとして二つのことを心に留めたいと思います。一つは今日の

箇所が述べていることは、最後のさばきの日はこのように必ず来るのだ！ということです。今の世界はいつまでも今のまま続くものではありません。最後には神と子羊の御怒りの日が来ます。このことを受け止めるなら私たちは過ぎ行く世ではなく、来たるべき世に向かって歩む者でなくてはならないでしょう。この世で私たちが持つ地位や名誉や富は、やがての日には何の助けにもなりません。その日、その人は自分は何と空しいことのために一生を費やして来たかと愕然と知り、後悔します。それらのものはすべて過ぎ去り、なくなるのです。そしてその日は突然来ます。どうしたら良いでしょう。誰がこの日に耐えられるでしょうか。答えは続く7章に記されます。そこにはさばきの日が来ても耐えられる人、その中で守られる人たちのことが出て来ます。それはキリストに信頼して歩んだ人たちです。ですから私たちにとって急を要する第一のことは、福音が差し出されている間にこれを受け取ることです。テサロニケ人への手紙第一1章10節：「この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。」

もう一つは、今日の箇所は根本的に信仰者への慰めとして語られているということです。祭壇の下にいる殉教者たちは叫びました。いつまでなのですか？と。神の正義が現される日はいつまでも来ないように見える日々があります。しかしその日は必ず来ることを今日の箇所は示しています。この日は主を待ち望んだ者にとって、その信仰の歩みが公に報われる日です。また悪に悩まされるフラストレーションから解放される日です。そしてついに約束された御国に入る日、新しい天と新しい地に住むようになる日です。その日は神のご計画された時に力強く現れます。このことを私たちも心に刻んで、この日を待ち望み、最後まで神のことばと証しのためにと生きる歩みへ励まされたいと思います。今しばらく悪が横行するように見える中でも希望を強く持ち、耐え忍ぶ歩みへと、そしてかの日には顔を上に上げる歩みへと。イエス様はルカの福音書21章28節で、今日見た内容のことが起こったら、「身を起こし、頭を上げなさい」と言われました。多くの人が不安に陥り、恐ろしさのあまり気を失うような中であって、主により頼む者はいよいよ贖いの日が来たことを見て希望に胸を膨らませ、身を起こし、頭を上に上げる。そのような不思議な歩みとその幸いへ導かれたいと思います。